西南報聞

春廼屋可稱

村春輔著

貮篇上

特40
623

東京府書籍館
TOKIOFU LIBRARY.

大日本教育會書籍館
函 架 號 冊

松村春輔編輯

西南報聞 春廼鴈が禰 二編

東京弘書堂藏版

春廼雁可禰二編之自序

于時本年二月中旬。本編の稿を全ふして。書房許贈らんとする處の折。東京日々新聞を披き見しに甚だ先生社説なるあり。鹿児島の椿文を載たり。余惘然として暫く明日入港

春廼雁可祢二編之自序

于時未年二月中旬。本編の稿を全くしまへて。書房許贈らんとする其の朝。東京日〻新聞を披き見れバ先生社説に載り。鹿児島の珍文を載たり。余愕然として驚ろき昨日の[illegible]

松村春輔編輯

西南報聞 春廼雁可祢 二編

東京弘書堂蔵版

春廼雁可祢二編之自序

于時本年二月中旬。本編の稿を全ふして。書房許贈らんとせる際の砌。東京日〻新聞を披き来れば先其社説なり。鹿児島の椿文を載たり。余愕然として嬉らく昨日へ薩南

萩の暴徒が一戦の下に命を落し。賊名を千歳の末迄遺るの覆轍あるも自ら悟る律を得ず狼心野猿の犢鼻褌を以て。縊れ死するの名詮自性。嗚呼。蠢愚の甚だしき。と私語く折しも書房の主人。催促[illegible]。机下に訪ひ暫く

讀て新聞を。其が儘巻に綴ひを乞ふ。先生之ハ四編五編と。薩摩の事件に。序次に依頼むと同病發るに。慾乃皮。例のやうに生氣ハ閉口。揮毫ハ止めずで。走らせ遅し。と注文直に。約定せり。実にや之も

鎮静の。的を不當ぬ。昇平の兆しを卜せし。祝言なれバ。愁張なり〳〵と。可なりと。云なんか花郎の南枝まづ蕾を破る縁日の梅花始めて清香を發せる夕部

柳東隠士松村春輔識

本間[illegible]人書

東京奇聞巻之三

第五章

東京寄留　松村春輔編輯

月ハ西山に沈んで孤雁影を送る頃しも十月廿四日真夜半過ぎ一報の狼烟天地に鳴動を開も此暗号に応じつゝ砂烟り蹴立てなれ何事やらんと櫻の馬場の鎮営にて哨兵の兵士ハ眼を定めて見る間程なく四方より遽かに起る陣太鼓

そこはかと無くゝ神樂の音鼕々々々と間近く听
えて現れ出たる一隊の人馬真先にハ天照大
神と墨太に書たる大旗一流を松吹く嵐に翻
へし其左右にハ動。静。或も御神勅と記しある小
旗を持ちて精兵大略一百餘り其中に衆に勝
れて天晴大将よと見受けらるゝ武者三騎駿馬
の頭を等しく競べて真物具せし隊兵を前後に
随がへ驀地に走せ来る此ぞ即ち異人ならぬ神
風連の巨魁と知られし上野堅吾。加陽霽堅。太田
黒伴雄の三暴賊にてや其夜の打扮ハ梨地打の
採鳥帽子に白綾の鉢巻なし萌黄威の腹巻にハ
松葉色の紋綃の直垂を着做し赤銅作の大野太刀
に虎の皮の尻鞘を掛け鵐尾に佩ぎ銀の蛭まき
したり小反の薙刀を小脇に搔ひ込み鴇毛の
馬にまたがりたり又加陽霽堅が装束にハ同じ
く冑をバ着して大江折の腰引立たる綃紋紗の

直垂に卯の花威の鎧着て肥後物作りの太刀を佩ぎ二十四指の鵜の羽の征矢を筈高に背負ひ塗篭籐の弓の真中を掴んで黒毛の若駒に金貝の唐鞍置せて打ち跨り続て大田黒乃打扮ハ一際きらびやかに華美なり先額きハ銀の大鍬形つけたる白星の冑を戴き肌にハ紺紫濃の直垂に桃色下濃の大甲の裾金物透間なく装ひたるを草摺長に着下し豹の皮の尻鞘かけたる大太刀を佩ぎ白檀磨の脛當に精好の大口張せ白鳥の征矢にハ村滋籐の弓の握太なるを燃立つばかりの真紅の厚総かけたる栗毛の三歳駒の平頸に引そへて雲珠鞍置きてぞ乗りたりける是に附属ふ賊徒の一類加々見十郎。深見栄記。福岡応彦。吉永秀雄。松田董蔵を始めとして随意々々の打扮したる肥後産の荒くれ暴武者神楽の拍子に鯨波を合せて無二無三に押寄せつ唯見

る二個の哨兵を右と左に殺倒しそれや営中へ乱入せり此時営内には木村軍曹宿直してありけるが唯事ならぬ物音をきゝやくもそれと听きつけり失火にもやと駈出して見れバ徒る為体に驚きながら取て返すを賊徒の大勢幷せ逃さじと追結め来りて頭上を深く切り下げられども軍曹ハものともせず営内に走り入り賊ありしと呼ばる程に此物音に驚き醒めたる兵士等ハ

狼狽へ騒ぎて銃炮を取る隙もなく部屋々々の戸口に蹈張り出るを込み入る賊徒は待ちうけ應と切倒し突殺しまるハ其一手ハ大槌を持て玻璨窓を打壊し有合ふものに石油を灑ぎかけてハ加藤清正が焼討の謀方ありとて古くより熊本に傳りたる竹筒に火薬を込め導火を付けたるに火を点けて扉を撰ぎて投げこむなぞ火薬を発して炎燄飛び散り石炭油に燃へうつれ

が見るまゝに砲隊の営内ハ一面の猛火となりて渦巻き立つる烟りの為に咽びて其所に死するもあり適々遁れて出るものハ賊徒の刄に殺伏せられて命を落せる者數を知らず既にして第二第三の両大隊ハ只蜘の子を散らせしが如く四方へ滚と崩れて見ゆるを坂谷少尉ハ屹と見てアレ見苦しの味方の振舞ひ恥を慮ふる者ハ無きや敵ハ僅かの小勢なるぞ一々撰ミ討にせよるもい

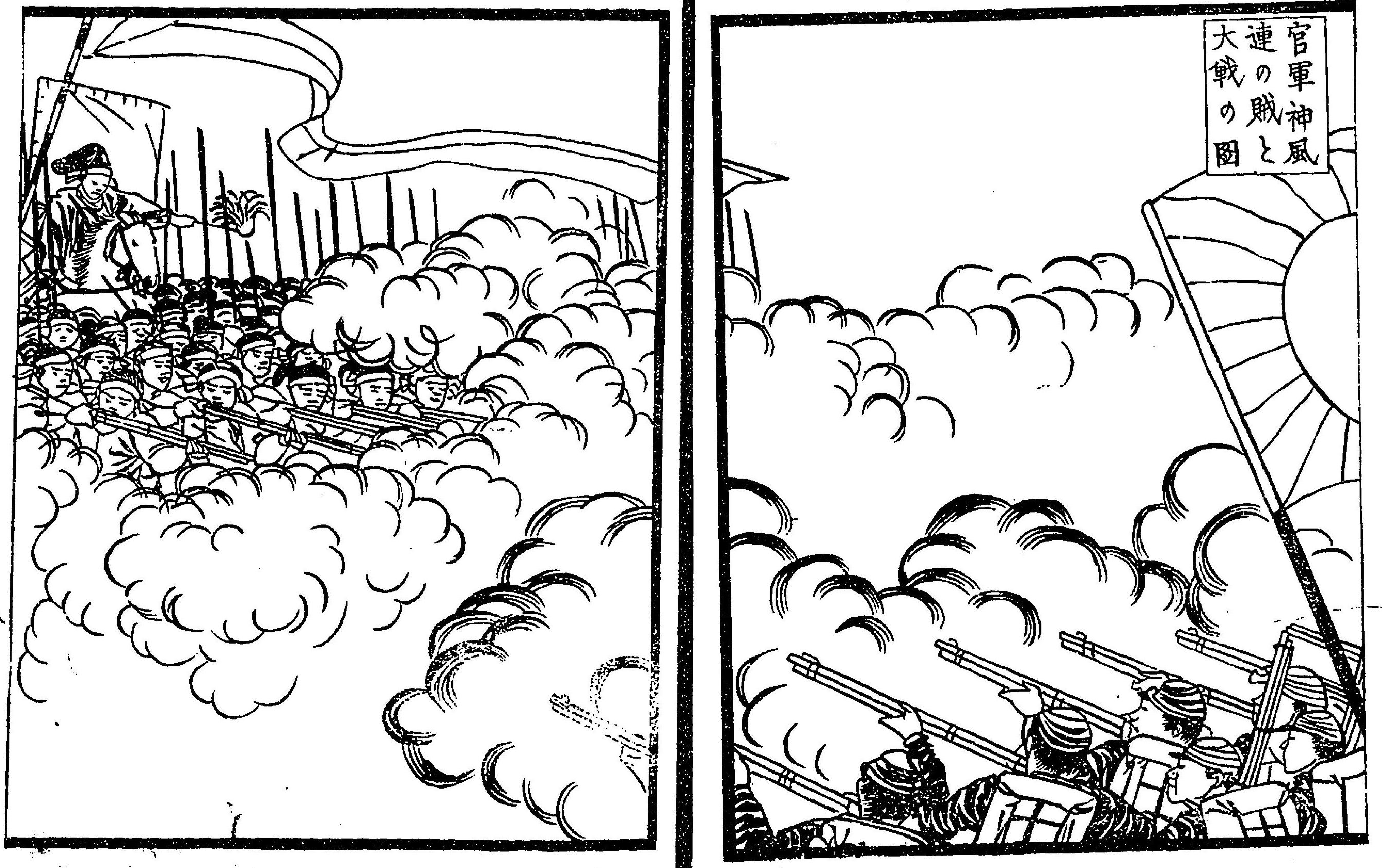
と安らぜ返せ戻せど呼び立るに此の言にや励ミけん名を惜ミ義を思ふの兵士十隊十四五人取て返せが阪谷ハ此兵を左右に隊伍て素より装藥せるの追るけれバ銃鎗を打揮りつゝ刄先を組合せ群る敵の中へ突て入り當るをさらまず薙立て揉らて忽ち一方を打破りて駈抜けつ後辺を見れバ憐れむべし兵隊ハ咸討なされて残るハ我身一獨のミ今ハしも是までなれ

と洋釼を杖き血潮を嗽りて一息吻と突たちあがり砲隊少尉坂谷敬一本年茲に二十三歳國の為め義の為めに討死せるを見置て汝等が後ちの亀鑑にせよやと声高らかに呼なりつゝ持る洋釼逆手にとり自ら胸板を突き貫ぬきて火炎の中へ躍り入り灰燼となりて果てたりき勇ましかりけるありさまながら又憐れなる序次なり依て去坂谷少尉ハ此夜の週番にて賊徒乱

入のはじめより手を尽して防禦し夫がために數ヶ所の手疵を負ひたりしかバ直さま病院へ走り入り有合ふ白布にて疵口を捲き再び営中に立戻り斯く目覚しく討死せり且此隊にありし兵士等も残りなく討死せしが其兵の必死の場に臨ミ心狼狽てしハ平常操練の如く鎗先に突ことをせず多く銃鎗を以て撲合ひしかバ賊徒ハ殺傷せる者尠なくして還つて漂に討ち込め

らせくり之を聞く事あり日本人ハ幼稚より撲
つに慣て突くに熟せざるの故なるべしと云ふ
みよりくも實に口惜やと其頃兵士の説話にけ
りと聞詰体再起つ徳て砲隊火尉坂谷敬一ハ身
ハ焔火の中に艶せ第二第三大隊の台兵敗北に
及びしかバ賊徒ハ益増勢ひ強く剣戟の光りハ
火影に靡くが如く暴虎馮河の血雄等第一大隊
に襲ひ蒐るに此時に當り第一隊ハ稍く備へを

立進ミ接づく暴徒に對し烈しく連発してたる
程に死地に恐れぬ暴賊も流石に火しく色めき
たり然ハあれども必死の覚悟を神風連鎧の袖
を楯としつ或ハ地上に匍匐なしがら台兵を削撃
せんと奮激突戦電光の颺く如きその折から聯
隊長與倉中佐ハ前に賊焔に寄宿を焼れ辛くも
煙火の中よりして聯隊旗を採り出し我服小脇
に搬込ミなしがら一先京町なる鮮開楼と呼ぶ割


官軍神風連の賊と大戦の図

烹店に走せ入りて手疾く衣服を脱換たりし兵
営さして走行く途中賊五六人斯と見るより又
ハヤ営賊遁さじと驀地に追ひ来り背後さ
まに切付らるゝも数ケ処の薄手を受しかども大功細
勤を顧るに閒なく兎角に営中に心懸ながら一退
一進洋劔に受流し打拂ひ遂に敵と離れ隔りや
すら営中に入ると等しく聯隊旗を押立て與倉
中佐茲に来りと大喝雷声散乱しある兵士を集

ゐに北辰忽ち衆星を迎へ隊伍矢庭に編整して
防禦の指揮図に適ひ勝誇りゐる賊兵を将棊倒
しに打まくめ前に二三の大隊兵が不意に取さ
る敗軍を挽復し直ちに會稽の耻辱を雪げり此
勲功や全く與倉中佐の忍耐と剛膽にあらざれ
ハ神速此大捷を奏せんや實に與倉氏の将任に
堪める亦稱しても讃をべし此一戦に賊の巨魁
上野。加陽を始めとし大半営兵の銃砲に打立て

らも其場を不去討死せり恁りし程に同夜縣廳
に進撃せんと手配りせし群賊等ハ廳門近く押
寄せるに疾くも廳中に防禦の備へ厳重に見え
たりしかバ賊兵ハ案に相違し鯨波の柏子も挨
け跭々として退く内営中へ向ひつる一手の勢
へ賊軍し頼ミ切つたる巨魁の二三も戦地に斃
れ或ひハ諸処へ散乱し脱走の途中に討れたる
も多しと聞き残黨寄るに處を失ひ路上に集ひ

急がはしく衆議卒然にして舊藩主細川護久君
の子息龍千代殿が北岡邸内に在るを以て彼地
に迫り乞んと陸続北岡に走り行く是より先き
龍千代殿ハ舊藩士等が暴動の變を聽き強て彼
等に擁せられも大義名分を失ふのこゝろ在京の父
君に對し且ハ曩祖累代の栄譽を損害せられもか
んと附從の家令家扶及び此變あより旧恩を深
く重じ追々に走集まりし士族輩正義の者と談

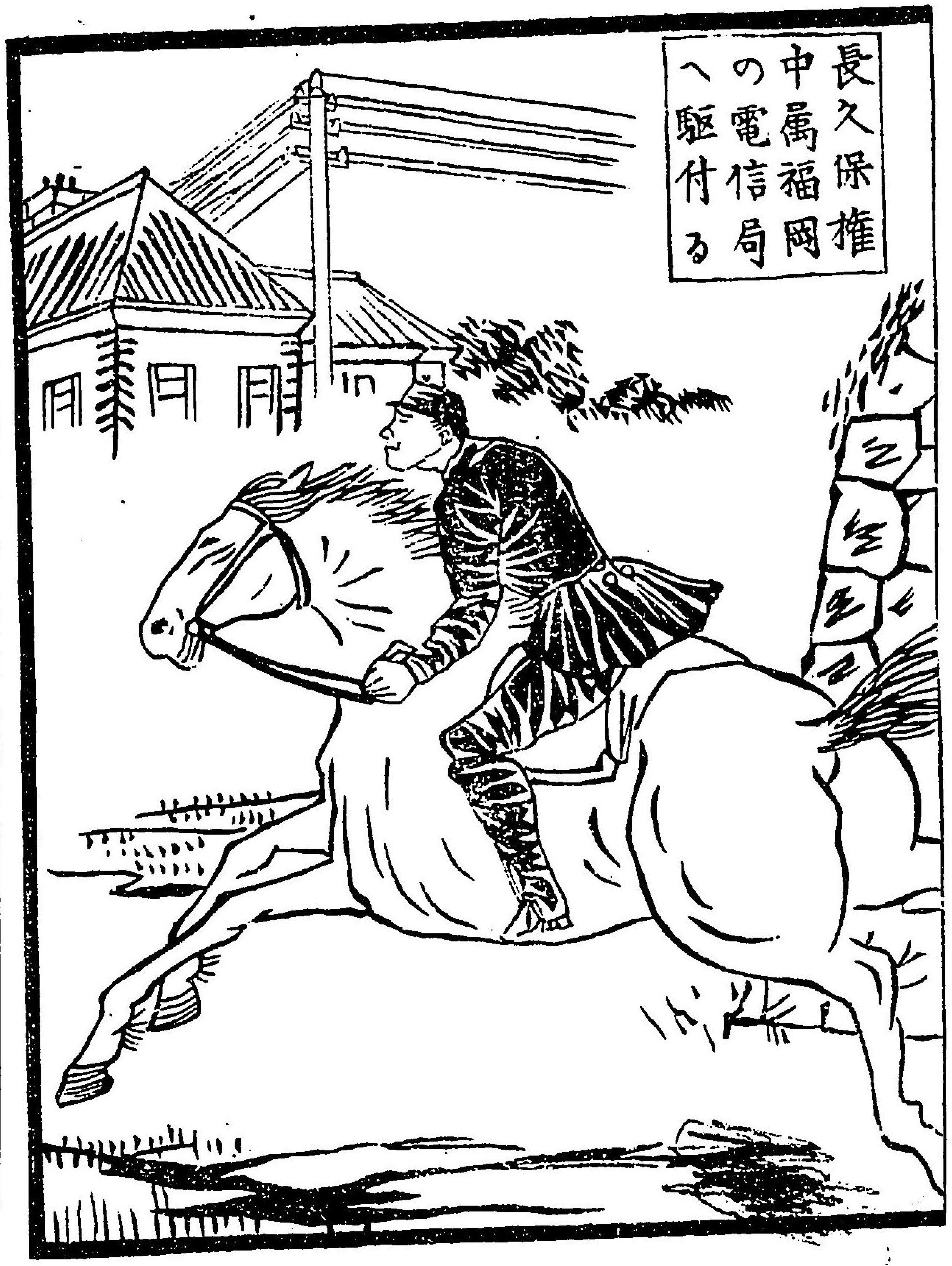
て語ひ賊の乱暴を恐るゝより士族数名を相倶して忍びやかに宇土の方へ落させられしと風聞せり時を過さずして暴徒数名戦地を潜り逃傷の血に染みし大童の出立ちにて該郷内に入り来り家令に面談を乞ふ程に士族の老長なるに接し来由を聞くに案の如く應援を求むるなれが老士懇々と大義名分を説諭し疾々退郷を命ぜしかば中には憤懣兇相を現はしたる徒も多かりしかど舊主の郷内流石に暴行も働きざるくやありけん切歯扼腕して立退りけるとぞ

龍千代君士族が護送を得て變を宇土の葛原に避られしが是ハ賊徒と牒合せらるゝものならんと世人一度疑惑を生ぜし風評喋々として聞ゆるもありて宇土にハ僅か一泊のみにして二十六日北岡へ皈郷の朝士族神西慶三郎ハ龍千代殿を郷に送り

我家へ帰らんとする途中始め嚢に納め携えたる刀を謬つて嚢をとり腰に帯びしを船場町にて巡兵に看留られ賊の餘黨と一議に及ぶや忽ち銃劍に突殺され此他護衛の士族等に兵器を帯びたりし者多く巡査に糺問せられ或ハ拘引に至りし者も多かりしが神西氏が如き不慮の災害を受けしハあらざりしとなん

第六章

茲に細川護久君ハ東京にありながら此暴動を聞や否直ちに家令某を熊本に遣かし藩士を説諭せられたりとぞ憑て賊魁の一人にて冨永守國ハ同じ賊徒大野鉄平が首級を持ちて藤さきの社務所に潜伏しておりけるを巡兵之を捕えて殺倒せり是より先き暴賊の中にて熊本の傳信局に乱入り其器械を打破り電線を切りける



長久保権中属福岡の電信局へ駆付る

ハ渠らが謀あふせしりと思ふ間もなく東京に
ハ疾く電報の来りしハ這頃縣下一般地租改正
の着手中にて権中属長久保猷ハ廻村中なりし同
夜の風説を聴より疾く熊本に皈り物せんと既
に帰路なれバ趣かりしが縣下ハ意外の暴変にて
最早電信の線路を絶しも計りがたし先夫より
ハ福岡に至りせん術あらんと直に福岡に来り
同処の電信局に依り此変動を東京正院に通じ

及び廣島大阪等の鎮台に達せしかバ卯刻陸軍中佐樺山資紀をして廿五日の午後六時軍費拾万圓を携へ熊本縣下に至らせたりして福岡長崎小倉佐賀其他より電報は陸続として實に櫛の歯を挽ぐ如きに人心連せて騒然たりしが廿六日にいたり内務少輔林友幸。陸軍少将大山巖同少将三浦梧樓を鎮撫使として増田七等判事清水大尉中川中尉石川中尉に医官二名

を隨へ春日艦に乗込ミ熊本に下らせけるに續いて大阪廣島の両鎮台よりも應援として出兵ありたる熊本近郷各縣の巡査は便宜によつて兵器を備へ其折しも陸軍少将曽我祐準井田譲の両名は中部西部の撿閲使として近方にありしのバ直ちに熊本に来り倶に會同せるの電報未だ政府に達せざるに廿五日の暮ころて正院の勅奏諸官は議合のために徹夜有しも

物議の主張確報なけれバ洶々とせしも林君が
熊本に至るや委政府に電報ありて殺氣漸くさ
めれバ浮説も倶に絶るになん偕熊本みくハ賊村
島一太ハ過ちを悔ひ自許に及び同賊米村勝太
郎。鹿島甕雄。兒玉忠次。水野貞雄等ハ大江村なる
米村某が家に自殺し植野常満。松井小門吉田三
郎。友田栄記等ハ平山村に自盡　青木暦太。荒川
敬二ハ荒川が家に死し齋藤久次郎。沼沢春彦。吉

海良作。岩越重内等ハ新営内に死し小篠源三。高
田源二郎。兼松群喜等ハ谷尾崎山王堂に辭世を
残して斃る熊本縣廳にてハ縣下の人心を鎮め
しめんと則ち左の布令を出させたりき
耶今変動に付てハ一般の者ども兵器を相
携え候義固く不相成候萬一携え候ハヾ袋
入とらんども巡邏兵或ハ巡査より直ちに
取あげ尚拒むにおゐてハ時宜により打擲

不可及も難計候條此度心得違無之樣可致
候此旨相達候事

明治九年十月廿六日

熊本縣令代理

熊本縣七等出

栗原戒平

之より熊本縣下ハ稍干穏の兆しふありぬ茲ふ
去る同廿七日の事なりん惨怛なる悲風ハ颯々
とし〳〵一音を報じ来るハ之ぞ他なし熊本縣令
安岡良助ガ廿四日の夜暴徒ガ為めに受けられし
傷害の療養叶はずして遂ふ黄泉の客となり
ましし事なれバ備前の縣令ハ故客となりしかハ
當時出張せられし内務權大丞坂部長照え縣
令の心得をもて事務を攝當し鎭台ふてハ少将
大山巌司令長官の令を奉じ文武の序次整列を
立バ人民安堵の思ひをなし餘賊ハ倍力を失ひ

専ら追捕の最中なるに殺氣再び破裂に及びし其報ハ筑前の國秋月なる士族三百餘名熊本の残黨に應ぜんとせる景状ありて賊徒追々熊本の方に走るの勢ひありとの風説市街に聞えしかバ人民まづ驚愕し物議洶々たる折しもあたか海路僅かに隔りたる山口縣下萩城において同藩の士族前原一誠奥平謙輔横山俊彦等巨魁となりて同志を募り既に暴動に及びしかバ秋月の賊

に機會を得て小倉の分営を襲はんと事を揚言し既に巡査を打ち走らし甘木地方に屯集し久留米柳川の士族を煽動するの勢ひありしによりて鎮台一小隊に適宜の所分を持て持兵器を許され巡査ハ之に聯合して逆撃せる準備ありしよつて秋月の賊ハ道を飯塚の方に轉じ出没變化の奇計をめぐらし熊本の残黨と相援せるの形況ありて彌人情の洶然たる中國に及ばんとせる

に諺にいへるが如き一犬虚を吠れバ万犬之に應ずとかや曩に熊本の神風連頑固の餘り卒然無根の虚言を吐露し我政府に抵抗せるの暴擧を為せしや苟くも時勢を鑒ミ名義を重んずる者ハ拒んで之に説諭もすべきを同氣相求むるの賊徒秋月の士族ハ其の始め熊本の砲声耳底に響くるや其が侭暴激の旗を翻へし先同國豊津の士族を鼓舞せんと同廿七日十月の事になん茲に復

豊津の士族の其が中なる友松淳一郎山川孝太郎の二個ハ同処士族の總代として熊本暴動の景況を探索せんと千手駅まで至りし折秋月の士族某二名ハ豊津の士族を暴誘せんと折柄此地に行き逢ひしが之れ幸ひと秋月からハ百方煽動の辞を備け誘なふといへども豊津の士族某ハ更に應ぜる景況あらねど之れを拒むの力なく遂に秋月の暴徒を連れ豊津に來れが士族

秋月の暴徒二名豊津の士族二名と議論の図

等ハ渠が暴変を忌て避んとするに秋月士族ハ
尚強腸にして退かざれバ友拾山川の二名に大
ひに持あまし詮方なく是を油佐原の宿処に止
め二名ハ豊津にかへり同士を集め急に一藩の
方向を定めんと議するに決する所あるを以て
秋月の如き不義の奴原にハ同意なさゞるを約
定し専ら防禦の策略を備けん為め集會せんとせ
るに法に悖るの不躰裁あらんにハ縣廳に對し

ても大人氣なし如何ハせんと温厚の士族共評
議して危急の防禦黙許を受けんと決心なし同
夜半各區の士族を學校に會同せしめ拒戦抗争
を用意せんにハ兵器なくてハかなハざれバ持兇
器ハ政府の嚴制とハ云ひながら事茲に至つて
ハ止を得ざるの次第と各刀劔を護身の為に携え
つゝ人數漸く調ひし折から秋月の士族なる
土岐真澄鈴木安香の二名来りけるハ豊津へる

ぎにハ杉生十郎之に應接を爲ありしを不在を
なをもつて別人にて談判に及びしうが土岐鈴木
等が云るやう我輩憂国の志し黙止がたく肥後
の義士等と約し此挙に及ぶ所なり公等聞とぞ
應せざるしハ暴言をもて迫らんとするを豊津士
族なる淡巖太といへる者進ミ出て彼二名が
非義を責め名義利害を分析説解するに渠等服
せずの色なく不平失望慍色を帯び終に學校を

立ち去りたる正に之ぞ明治九年十月廿八日の
事にありん此日熊本ハ更なり秋月の景況も穏か
ならざりけるが斯て政府にても草賊鎮撫の尋常
ならざれバ所詮平定の目的も見ざる物の全國一般を
してかの布令を布れたまひしより即ち其文に
いはく

熊本縣下賊徒暴動に付追討被仰出候條此
旨布達候事

明治九年十月二十八日　太政大臣　三條實美

右の布達とともに少警視迫田利顕同檜垣直枝を始めとし巡査数百名九州地方出張すべき命辞令書を拝し即日午後四時をもって浅間雲揚の蒸氣に乗込み横濱を出帆し波濤遥に走りかけ里

春廼厂可補巻之三終